第一章　メシア主義、精神主義、および人格的態度

マルセル・バタイヨン（Marcel Bataillon）は、十六世紀のエラスムス主義とスペインの精神生活に関しての驚嘆すべき書を刊行した。[1] それはメネンデス・イ・ペラーヨ（Menéndez y Pelayo）が一八八一年に『スペイン異端思想史』（*Historia de los heterodoxos españoles*）とともに始めていた、長きにわたる研究にピリオドを打つものとなった。完結した完璧なバタイヨンの研究は、知的にして完成された、あらゆる仕事に見られる美というものを具えている。彼の透徹した分析の背後に窺えるのは、正確さと中庸を断固として貫こうとした著者の姿である。歴史に関する真正なるあらゆる建造物は、詰まるところ、歴史家自身の生の表現である。こうしたケースにおいて目的となるのは、前もって設定しておいた厳格な制約を超えないことである。

そこで扱われた諸問題は、バタイヨンがエラスムス主義について形成した概念に対応している。そして、かの大いなる出来事を説明することに役立つ、あらゆる対象へと水平的に広がっている。ひとつとして無駄な部分はない。またいい加減な分析に終わる部分もない。さらに加えて言えば、何ひとつ主観的な主張もない。九百ページにも及ぶ大著を通じて、かかる緊張を維持することは、今日においては稀な大業である。かくも知的に組み立てられたかかるピラミッドから、ひとかけらの石も取りのけることはできない。ところでその問題を再考することは、かくも壮麗な建物に対する最大のオマージュを捧げることとなろう。

スペインのエラスムス主義と言われるものは、イデオロギーというよりもむしろ、意志に関わる事象であった。しかし同時にそれは、正確な領域と目的をもった宗教的信念というよりもむしろ、伝統的なキリスト教に対する批判的態度であった。そうしたところから、人がスペイン史上の大いなる事象を、厳密な概念の枠組みに組み入れようとすると、困難にぶち当るのである。人がエラスムス主義において、より生き生きと感じ取るのは、かくあるべし、というよりも、むしろかくありたし、という態度である。実際問題、われわれは命題よりもむしろ、まとまった態度や姿勢といったものを目の当りにするはずである。ルターの姿勢から生起したのは、体系としての宗教的原理であった。それらは勝利を収めたり敗北したりしても、常にそうした原理原則としての在り方は、変らなかったはずである。ところが、スペイン人のエラスムス的熱意は、それとは逆で、文化的水準や内容の差異はあるにせよ、己の生の環境という点において、ルターよりもサヴォナローラ（Savonarola）の運動とより似通っている。それはそれとして、

エラスムス主義というものは、文化や社会的地位にしっかり支えられて生きていると感じていた人々によって選択された、精神的に見て贅沢な態度であった。また開放的に多くの支持者を惹きつけるものとして、想定されてもいなかった。フアン・デ・ベルガラ（Juan de Vergara）はトレードの聖堂参事会員にして、大司教の秘書であったし、アルフォンソ・デ・バルデス（Alfonso de Valdés）は皇帝の秘書であった。アンドレス・ラグーナ博士（doctor Andrés Laguna）は宮廷お抱えの医師であった。ドン・フアン・マヌエル（Don Juan Manuel）〔中世の散文家とは別人〕は大使であったし、マリーア・デ・カサーリャ（María de Cazalla）は極めて裕福な地位にあった。他の多くのケースでもかくのごとくであった。そこにはさらにもっと高位の地位にあった同調者は含まれてはいない。たとえば、大司教で枢機卿のマンリーケ（Manrique）やフォンセカ（Fonseca）、セネーテ侯爵夫人（marquesa del Zenete）を始めとする貴族たちである。こうした者たちと主従関係や友人関係で結びつき、異端審問にかけられた様々な者たちがいた。エラスムス主義を超えて、社会の最下層にまで達したものは、照明主義と混同されたりもした。あるいは教会の膨大な富と彼らの封建的活動に対する民衆の敵意と混じり合うこともあった。かかる敵意は、宗教書とか議会の議事録、世俗文学、十六世紀前半の演劇などに顕著に見られる。しかし精神的教えとしてのエラスムス主義は、社会的ないしは政治的な行動とは関わりがなく、個人的願望の繊細な部分でもってこと足りていた。個人的願望は、かつて自身の生をしっかりと磨き上げたからこそ、今の自分があるという誇りに基づいていた。

ところで、いわゆる《キリストの哲学》（philosophia Christi）――人間とはキリストを頭とする精神体（cuerpo místico）であるとするもの――は、教会の構造内部に爆弾を仕掛けることを意味した。というのも、教会とは信徒の大多数にとって（スペイン人キリスト教徒は全てが教会の信徒であった）、祈り、儀式、聖人信仰、そして（エラスムス主義者に言わすと）旧来の迷信の残滓やその他多くの事柄からなっていた。一言で言えば、目視しうる地上的なるもの、ということである。かてて加えて、そこには恐ろしいほどの経済力も含まれた。そこに法律上の諸権利が伴うことで、国家権力と衝突することもあった。エラスムス主義は教会が占めていた地位を、見かけ上は何ひとつ動かすことなく、そうしたものすべてを変容させようとしていた。エラスムスとスペインの帰依者たちは《条件が大きく変更されていない限り》（sic rebus stantibus）「素晴らしき精神的信仰を育んでいこう」と考えていた。かかる内面的キリスト教が好んだのは、福音書と単純な心の祈りであった。そして個々人の宗教体験が得られる状況が増すのと軌を一にするかのように、伝統的な慣行から遠ざかっていったのである。したがってこうした信仰は、閉鎖的で厳格な教えではなかったので、エラスムス主義者の数だけ、かたちや色合いが異なっていた。

宗教的であれ科学的であれ、伝統的な信念が別のものに取って代わられるには、古いものが無効とされねばならない。そして新しいものがいかに斬新であるかを、はっきり示さねばならない。

もし刷新者が中途半端に、そして逡巡して新しいものを示す限り、それは単なるユートピア的な提案に化してしまう。これに類したことが、少なくとも宗教的な内容に関して、スペインにおけるエラスムス主義において起きたのである。実際にスペイン人高位聖職者たちの多くは、教会そのものに触れず、教会の内部から、しかも広く起きていたことを全く考慮に入れず――エラスムス主義は国が求める方向を指し示しているという理由から――エラスムス主義に依れば、各人の精神的欲求、しかもそれのみに基づいた、ごく洗練されたキリスト教こそ繁栄するはずだと信じたのである。とはいえ、それとても、別の異なる何ものかによって取って代えられるべき大義となっているものが――どのように継続するかは誰も分からないとはいえ――存在し、完全に継続していることを前提とする限りであった。無知な人とか単純な人が、途方もないことをでっち上げても、それは関心を呼ばない。なぜならば、そうしたことは常に起きたし、今でも起きているからである。ところが特異なのは、そうした現象が宮廷の周辺、トレード大司教の傍ら、アルカラ大学のごとき学知と瞑想の場において起きたことである。何となれば、考えても見られたい、エラスムス主義は頭で考えた計画でもって、今あるものを打ち倒し、新しいものに取って代えるといった、革命思想などではなかったからである。それは見て見ぬ振りをしないで、すでに存在しているものが、突如として、今までとは異なった在り方をすることを受け入れることだからである。エラスムス主義はローマへの従順を無効にしようとはしなかったし、教会の序列を混乱させようという意図はなかった。スペイン教会を設立しようという目論見もなければ、信仰を変革せんとする、つまり《典礼》を変革する目的すらなかった。これは敵を油断させて欺くやり方だったのだろうか？　そうした目的があったとは考えられない。なぜならば、教会との断絶は、エラスムスの思想や彼の生き方の全体的な意味とは、元来そぐわない解決法だったからである。そんなことをすれば、エラスムス、ましてやスペイン人信徒の大部分が受け入れなかった、ルター主義やそれに類したものとなっていただろう。だとすると？　かくも奇妙な事象の歴史的意味を見出さねばならないのは、スペインのエラスムス主義という具体的ケースを超えるような理由のなかにおいてである。スペインのエラスムス主義は、当然のことながら、エラスムス自身を問題にするときのように、個別的な事象として捉えるべきではない。なぜならば、彼は個人としては、詩的に言ってみれば、思想的夢想の泉を流れるに任せただけだからである。

個人的態度

スペインならではの特徴としてありうるのは、人が真に関心をもつ行動というのは、せいぜい神や隣人や自身を前にしたときに、個人的態度としてとる態度くらいだということである。そのことを裏付けるのは、極めて意味深長な次のような言葉である。「うまくいく、きちんと収まるさ、たかが紙切れ、どうせ反故みたいなもんさ」（quedar bien, dejar en buen lugar, ¡vaya un papelito!, ¡qué

papelón!「português *papelão*」)。ここではカルデロン的な名誉が《世論》と見境がつかなくなっている。これに類した多くの表現は実際問題、他国語には翻訳し得ない。なぜならば、表現が何に言及しているのかが分からないので、さっぱり意味がつかめないからである。

他の民族であれば、当然のことながら、人間的振る舞いのもつ価値が指し示すものが必ずどこかに存在する。しかし改めて指摘しておくが、この種のテーマこそ、スペイン人の間では、極めて突出した重要性を帯びているのである。人々は《立派な益荒男ぶり》(hombría de bien)を発揮している瑕疵なき指導者を、常に神のように祭り上げてきた。この表現自体もまた別の意味深長さを帯びている。この種の人間は、悪事に手を染めることを控えるが、それは悪事を行わないことが倫理的なことであるからであり、現在ある在り方(es)よりもむしろ、かくあるべき(deber ser)未来にこそ倫理性があると考えているからである。有能かもしれないが生活習慣で堕落した政治家は、滅多に許容されることはない。そして正しい政治的判断よりも、強欲さゆえに記憶されるのが普通である。こうしたことは何度となく指摘されたことであり、管見する限り《上辺だけの道徳心》(moralina)という言葉は、アソリン(Azorín)がひねり出した言葉である。ここで重要なのは、そうした道徳性への偏りと、それとの相関性をもつ《態度》[2]や《象徴》人間(hombre «emblema»)とを結びつけることである。《象徴》人間は、世の中をうまく泳ぎ渡ることに長けていて、自己に関して、ある種の思い上がった卓越性のなかに生きていて、決して「自らの手を汚さない」存在である。そこからスペイン文学の黎明期から今日に至るまで頻出する、教訓主義や説教が生まれてくる。こうしたものはある種の外国人——たとえばレオ・シュピッツァー(Leo Spitzer)など——には、到底理解できないところである。筆者が本研究を執筆しているのは、スペインという軌道のなかにおいてであって、私はそこから逸脱することはできない。したがって私には、そうした軌道を回っているものが何なのか理解しうるし、少なくともそれを体験している。

すでに『シッドの歌』のなかで、かの英雄についてユダヤ人たちに借金のかたに宝石ではなく、砂を詰めて渡したとはいえ「不誠実な行為は一度として行ったことがなかった」(una deslealtança non la fizo alguandre)と述べられている。しかし詩人にとって関心があったのは、「態度」のなかに体現されている《道徳的象徴》を強調することであった。エル・シッド(El Cid)は妻ヒメーナ(Jimena)に向かって「そなたを前にして、勇気が凜々と湧いてくる」と述べている。後日、セルバンテスもまた「戦場で戦う兵士とは何と幸せ者よ、王様にご照覧いただけるのだから」と『ペルシーレス』(*Persiles y Sigismunda*)のなかで記すこととなる。別の角度から言えば、『セレスティーナ』(*La Celestina*)のなかで、カリスト(Calisto)がどういう態度をとるべきか分からず、どうしたらよかったのか、思い悩む場面があったことを今一度想起すべきであろう。

いまやわが家の名折れとなるやもしれぬ(……)おれはど

うして自分がはっきり破滅すると分かっている隠れた原因を、究明しに出かけなかったのか？　一体何をしたらいいのだ？　どうしたらいいと言うのだ？（……）そうだ、出かけることだ。もし自分がその場に居合わせたと言うために出かけるなら、もはや遅すぎる。もしいなかったと言うためなら、早すぎる。

〔第十四幕〕

文学史上の最高作品の高いレベルからは逸脱するが、スペイン的なるものを象徴する、生き生きとした精粋的な部分に触れる挿話も存在する。虫の好かぬ議員から鼻薬をかがされ投票を依頼された、ある貧しいアンダルシーア男はこう答えた。「腹は空かせど、わしの主人はわしだ」。また毎週のように施しを受けていたある乞食が、前週は姿を見せなかったことを、施し人から問いただされたとき、彼の返事は次のようなものであった。「奥様、何なら別の乞食をお探しになってくださいな」。もっとずっと高尚なところでは、スペイン・クラウゼ主義（krausismo）の立役者フリアン・サンス・デル・リーオ（Julián Sanz del Río）の示した、大いなる特徴的振る舞いがある。これもまた、今まで述べて生きたことと完全に通じ合うものである。ドン・フリアンはドイツで数年間、クラウゼ思想がスペイン的なるものの最も感覚的な部分と合致していたので、その思想を吸収同化して帰国し、マドリード大学の哲学教授の地位を獲得した。しばらくすると彼のなかに幾つかの迷いが生じた。それは、自分は哲学の講座を受け持つのに本当に相応しかっただろうか、という疑念であった。すでに優秀な教授となっていた彼は、教鞭をとることを延期し、数年間を研究と内省のために、イリェスカス（Illescas）というトレードの寒村に隠遁した。かくもの厳しい禁欲生活の後に、彼は記念すべき名講義を行い、そこからスペイン・クラウゼ主義は花開いたのである。これはほぼ半世紀にわたってスペイン人の知性を支えることとなる、唯一の滋養分となった。クラウゼ主義は生に奉仕する哲学であり、行動様式に影響を及ぼすものであった。それはほとんど世俗的敬虔の一形式ともいうべきもので、姿勢（ademán）や《象徴》（emblema）といったものを大いに好んだ。クラウゼ主義における思想は、時として、思考していると感じている者の態度そのものと化した。知そのものは、方法ほどに大きな重要性をもたず、内容はそれを獲得するための生の配置ほどにも価値はなかった。

こうした生そのものは文学的技法に道を拓くことはなかったが、文学と結びつくことで、究極的ケースとして、ドン・キホーテの行動と態度となったと言うことができるかもしれない。

彼女たちは下着をお着せするから、裸になってくれるようにと、ドン・キホーテに頼んだが、遍歴の騎士にとっては慎みもまた、勇気におとらず似つかわしいものに見える［である、とは言っていない］と言って、何としてもその申し出を受け入れようとはしなかった。

〔後篇、第三一章、会田由訳、以下同様〕

我らの大いなる騎士はその後すぐに、従者風情にはとうてい理